

一 ハーヴェイ以前の血液循環理論について 藤倉 一郎
五月例会 平成八年五月二十五日(土)

順天堂大学医学部九号館八番教室

- 一 古記録に見る室町後期の患者たち 水谷惟紗久
- 一 着想としての内視鏡 多賀須幸男
- 一 森鷗外作「なかじきり」解釈の試み 「医」に関する言及をめぐって― 志田 信男

例会抄録

五行―中国古代医学の枠組み概念 其の二―

家本誠 一

五行の古典は書経の洪範である。民生必要の五つの材質を示す。中国古代医学はこれを使ってその内容を整理する枠組みとして活用した。本稿では、その状況を検討する。

五行の医学的定義

素問、藏気法時論二二に云う。「五行とは金木水火土。更々貴、更々賤、以て死生を知り、以て成敗を決す。而して五藏の気の間甚の時、死生の期を定むるなり」と。

更々貴、更々賤とは五行の各要素の間に相生相克関係のあることを謂う。死生を知り、成敗を決すとは、病気の予後を

判断することである。間甚の時、死生の期を定むとは、病気の経過、転帰を判定することである。

相生相克に依つて臓器組織の機能間に促進と抑制という相互関係が成立する。同時にこれは疾病の経過を決める原理となる。これが古代医学の形態学、生理学を特徴づける。

五行の機能

第一に五行は分類の枠組みとなる。天地間の万物は其々の部門に於いて五つに分類されて相互に関連づけられる。ここに成立する表を五行配当表と呼ぶ。その一部を掲げる。

木	東	春	蒼	酸	肝胆	呼	怒
火	南	夏	赤	苦	心小腸	笑	喜
土	中	土用	黃	甘	脾胃	歌	思
金	西	秋	白	辛	肺大腸	哭	憂
水	北	冬	玄	鹹	腎膀胱	呻	恐

陰陽を時間的空間的に展開すると五行になる。春、東方に陽氣が芽生え、夏、南方に大盛となり、秋、西方に減衰し、冬、北方に収斂する。陰はこの逆の盛衰を示す。青春の樹木は春、太陽の火熱は夏、白金の冷氣は秋、玄暗の北海は冬、中原の黄土は土用の象徴である。五行はこの木火土金水との類比によつて万物を分類する枠組みとなる。色や味は季節や風土の景観や食物と関連する。人の行動や情意も明より暗へと配列されている。

動植物の成長化収蔵のライフサイクルも此の五行のリズムに同調している。従つて人の形態も生理もこの原理に依つて

論理的に分類することが出来る。その結果は五藏系統として成立した。

第二に五行は相生相克關係に基づいて自動制御システムを作る。これにより五藏系統を構成する蔵府相互間に動的関連が成立し、ここにフィードバックシステムを内臓する機能関連が成立した。臓器組織はばらばらの雜然とした存在から整然と組織化された器官系統として構成される。

五行配当—形態と機能—(表は省略)

この配当表に於ける臓器組織の相互關係は意外に良く出来ている。目と肝はビタミン代謝の上で相關する。舌と心經は頸動脈で連携しており、舌炎、口内炎の診断、治療に利用される。大腸と肺は藥理的に関連があり、脱肛や直腸炎が麻杏甘石湯と云う喘息の藥で輕快する。骨と腎との關係の如きは二千年の昔になぜ分かつたのか不思議な位である。

病因論

病氣は風雨寒暑(天)、飲食居處(地)、陰陽喜怒(人)という三才の変動に依つて發生する。この変動を五行的に展開すると、古代医学に於ける主な病因因子が發現する。即ち、風寒暑濕燥、酸苦甘辛鹹(五味)、怒喜思憂恐(五志)である。居處即ち生活様式は四方の土地の風土病の原因となる。

疾病記載論

現代医学では疾病に関する諸事項は病名の下に記載される。この点は中国古代医学でも同じである。しかしもう一つの記載法がある。それは病因、病名とは關係の無い、臓器組

織それぞれに固有の特徴的で特異的な症候パターンである。臓器組織は上記の五藏システムとして系統化されているので、症候記載はこの五藏システムの上に展開することになる。

傷寒は六經脈の症状から成る。瘧には六經の瘧と五藏の瘧がある。傷寒でも瘧でも同じ太陽膀胱經が傷害されれば、同じような症状が出る。故に治療は病因特異的ではなく、この症候特異的に行なわれる。太陽經が傷害されれば、病名に拘らず同じ処方が使われる訳である。これを漢方の証的治療と云う。

予後転帰

病氣の経過は五藏の相生相克關係に沿つて展開する。肝の病は夏に癒え、秋に悪化し、冬に持ち直し、春に立ち上る。形式的ではあるが、全くのでたらめとも云えない。

まとめ

五行はこの他、診断治療にも利用されている。しかし主たる活用面は、臓器器官の系統化、病因論、予後転帰論の場面である。これにより医学は立体化され、動態化することになった。

(平成八年一月例会)